九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

飛鳥井雅康の「詠五十首和歌」について ：〈付〉祐徳稲荷神社中川文庫蔵本 翻刻

日高, 愛子
九州大学大学院人文科学研究院 ： 専門研究員

https://doi.org/10.15017/1518327

出版情報：文獻探究. 52, pp.17-27, 2014-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

飛鳥井雅康の「詠五十首和歌」について　〈付〉祐徳稲荷神社中川文庫蔵本　翻刻

日高　愛子

一

飛鳥井雅康（一四三六―一五〇九。法名、宋世。号、二楽軒）は、最後の勅撰集である『新続古今和歌集』の撰者、飛鳥井雅世の次男である。兄に雅親（一四一七―一四九〇。法名、栄雅。法号、蓮心院）がおり、その猶子となるも、雅親には実子雅俊（一四六二―一五二三）がいたため、家督は雅俊に譲った。文明十四年（一四八二）二月四日、近江松本にて四七歳で出家した（『親長卿記』他）。

雅康は、兄雅親と共に足利義尚（一四六五―一四八九）の蹴鞠・歌両道の師範であったほか、殊に書においては義尚に多大な影響を与えたとされ、二楽軒流の祖でもある。蹴鞠書や歌学書など数多の著作が現存し、武家に対して蹴鞠・歌両道の相伝を積極的に行っていたことが窺われるが、とりわけ「宋世口伝」とも称される飛鳥井流切紙口伝が雅康の著述として残されていることは注目すべきで、雅康は飛鳥井流の秘伝やその相伝体系を形成した人物として極めて重要な役割を担っていたと考えられる。

二

さて、本稿で取り上げるのは、雅康の「詠五十首和歌」（以下、「雅康五十首」）である。雅康五十首については、夙に井上宗雄『中世歌壇史の研究　室町前期』（風間書房、一九八一年）に言及があり、次の伝本が確認されている。

(1) 祐徳稲荷神社中川文庫本
（外題）「五十首和歌　宋世」（内題）「詠五十首和歌」

(2) 内閣文庫本
『賜蘆拾葉』第一集収録。（内題）「詠五十首和歌」

(3) 岡山大学池田家文庫本
（外題）「宋世百首／采世五十首／頓阿百首大神宮宝納／頓阿百首句題／玄旨百首」（内題）「詠五十首和歌」

祐徳稲荷神社中川文庫本は巻末に、

元禄六年癸酉歳

仲冬中旬、再令写之畢。[1]

として、元禄六年（一六九三）の書写奥書を持つ。伝本全てに共通するのは、次に示した、明応八年（一四九九）の本奥書である。

明応八年十二月廿一日、於微妙寺之山陰、焼火之中、詠之。不可在他見云々。

右、二楽軒五十首詠草、以自筆之本、写焉。

この年の雅康の動静を見ると、『後法興院記』同年五月一日条には、

五月一日庚申晴、二楽院来、明後日東国辺下向、為一見富士云々、為暇乞来也。

とあり、その翌々日に、雅康は富士見のために京都を出発している。

明応八年五月三日、富士歴覧のために、都をおもひ立侍りて、江州柏木郷にとゞまりて、四日の朝にたち侍るに、社頭のふしをがみ奉りて、

柏木に跡たるゝよりも里のうちにさこそ葉守の神も守らめ

内白川、外白川、きのふの雨に水まさりて、人々わたりかね侍れば、心のうちに祈念侍りし。[2]

（富士歴覧記）

右のように書き始められた『富士歴覧記』は、このときの富士遊覧の模様を記録した紀行文である。その末尾に、

いまだ都に中納言入道宋世ありしとき、するがの国へ下り侍るよしきこえしかば、侍従大納言実隆卿申つかはされける、

これはまたいかに忍ばむうつの山とをき昔も近きむかしも

返し

今はまた夢ばかりなるあらましのうつゝになれば宇津の山越

これは、むかし、曩祖雅経卿、ふじみ侍らむとて、くだり侍りしに、宇津の山にて、「路分し昔は夢かうつの山あとともみえぬつたの下道」とよめり。また、父雅世卿、かの山をとをり侍りしに、雅経卿の歌をおもひいで侍りて、「むかしだにむかしといひしうつの山こえてぞ忍ぶ蔦の下道」とつらね侍りしことを、「遠きむかしもちかき昔も」とよめるなるべし。

（富士歴覧記）

と述べる如く、飛鳥井家の始祖である雅経の富士見や、雅康の父雅世が足利義政に供奉した際に著した『富士紀行』を強く意識した内容であり、雅康が富士見を思い立ったのは、雅経と雅世の事績を慕ってのことと思われる。

『富士歴覧記』は、六月九日に小夜の中山から富士を一見し、十首を詠じた後、七月七日に伊勢へ戻るところで終わるが、

三井寺のほくりむばうといへる人の本より、つかはしける。

うへもなき二の道にふじの山ならべて三のたかねならましかへし

ふじの山をよばぬ道はさもあらばあれねがひはみつのたかねならまし

として、三井寺の「ほくりむばう」なる僧と思しき人物（未詳）との和歌の贈答が最後に記されていることに些か留意しておきたい。

その後の雅康の足取りについて、詳細は不明だが、井上氏の指摘によれば、「九月十六日「世上儀迷惑之趣」（事情不明。政家記）により大津に移住」[3]し、一二月二一日にこの五十首を詠じた。場所は、本奥書に「於微妙寺之山陰」とある。微妙寺は、滋賀県大津市にある三井寺の別院である。「焼火」とは、焚き火のことか。微妙寺は三井寺境内の南の山内に位置する。一二月の寒い時分であり、夜を徹しての五十首詠であったかと想像される。

ところで、右記『富士歴覧記』末尾の三井寺僧との贈答歌には、「二の道」「をよばぬ道」が詠み込まれていた。雅康が飛鳥井家の人であることを踏まえれば、この「二の道」が、単に旅路をさすのではなく、蹴鞠道と歌道を意味することは明らかであろう。[4]『新古今集』の撰者の一人であった雅経や、『新続古今集』を撰した父雅世を慕っての富士遊覧の最終で「道」について詠んだことには大きな意味がある。この頃、雅康は既に出家して久しく、家督を譲った甥の雅俊との確執も溶解していたようであるが、庶流として生きる晩年の雅康の蹴鞠道や歌道への執着が「をよばぬ道はさもあらばあれ」と詠ましめたようにも思われる。微妙寺に籠り五十首を詠じたのも、こうした富士遊覧の余韻覚めやらぬ頃のことであり、雅経や父雅世に思いを馳せながらの営為とも解せるであろう。

三

では、「雅康五十首」の具体的な内容について、見ていきたい。

「雅康五十首」は、春一二首・夏七首・秋一二首・冬七首・恋六首・雑六首から成る。歌題は、定家の『拾遺愚草』や、雅経の『明日香井和歌集』に収められる「仁和寺宮五十首」による。[5]次に掲げた『明日香井和歌集』「仁和寺宮五十首」の歌題と歌数を参照されたい（私に通し番号を付した）。

春十二首
1初春・2雪中鶯・3橋辺霞・4行路梅・5春月・6岸柳・7旅春雨・8遠帰雁・9山花・10関花・11庭花・12河款冬
夏七首
13杜卯花・14早苗多・15里郭公・16岡郭公・17夜盧橘・18籬瞿麦・19江蛍
秋十二首
20早秋・21萩露・22荻風・23尋虫声・24山家月・25野径月・26舟中月・27暁鹿・28河霧・29擣衣幽・30夕紅葉・31残菊匂
冬七首
32朝時雨・33竹霜・34池水鳥・35島千鳥・36松雪・37湖雪・38惜歳暮
恋六首
39寄雲恋・40寄露恋・41寄煙恋・42寄草恋・43寄鳥恋・44寄枕恋
雑六首
45暁述懐・46閑中灯・47山旅・48海旅・49野旅・50寄松祝

『明日香井和歌集』の伝本には、宮内庁書陵部蔵『雅経集』（内題「明日香井和歌集」二六六‐七〇九）など、

右一帖者、曩祖雅経卿之集也。依柳営之尊命、令書写畢。
文明十五年五月十日　宋世

とする書写奥書を持つものが幾つかあり、[6]雅康が文明一五年（一四八三）に足利義尚の命を受け、『明日香井和歌集』を書写していたことが確認される。雅経のことを「曩祖雅経卿」と記すのも、『富士歴覧記』と共通する。始祖雅経を重んじるのは飛鳥井家の人物であれば当然のことであったろうが、とりわけ雅康は雅経に対して並々ならぬ尊慕の念を持っていたものと思われる。恐らく、「仁和寺宮五十首」に倣い、五十首を詠じたのも、雅経の五十首からの影響であろう。

但し、和歌の表現においては、雅経の歌からの直接的な影響は殆ど認められない。唯一、雅経の五十首との関連が見受けられるのは、次の歌である。

12くちなしに咲山吹のかひもなし名にも花にも井手の玉水（河款冬）

雅経の五十首には、

12やまぶきのゐでのさと人ぬしやたれはなはこたへず春のかはなみ（河款冬）

とある。雅康の歌は、「くちなしの色にぞすめる山ぶきの花のしたゆくゐ手のかはみづ」（『千載集』春歌下・一一五・藤原定経）などの歌を踏まえたもので、雅経の歌は「山吹の花色衣ぬしやたれとへどこたへずくちなしにして」（『古今集』雑体・一〇一二・素性法師）を念頭に置いたものだが、いずれも「河款冬」の題で山吹と井手を詠み込んでおり、雅康は雅経の歌からも着想を得た可能性がある。

雅経や父雅世の歌と似た趣向のものは、この他にも散見される。

2春といへば宇治の橋姫夜や寒きそらに霞の衣かたしく（橋辺霞）

この歌は、「さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらむうぢのはしひめ」（『古今集』恋四・六八九・よみ人知らず）による。この古今集歌は『古今和歌六帖』や『古来風体抄』などにも入り、広く知られたものであり、「宇治の橋姫」も多く詠まれているが、『明日香井和歌集』にも、

かたしきやおきまよふしものさむしろにいくよのふゆをうぢのはし姫（四一五）

さ莚やうぢのはし姫いかならん波のみよるのせぜの網代木（九九一）

かたしきのかすみふきみだる春風になほさむしろのうぢのはしひめ（一一四三）

として、「宇治の橋姫」の歌が三首見られ、雅経がこの歌材を好んで詠んだことが窺える。殊に、「かたしきの…」（一一四三）の歌は、霞みつつも猶肌寒さの残る早春の様相と「宇治の橋姫」を合わせ詠んだもので、雅康の歌と似た趣向の歌といえる。

13榊葉に見ぞまがへつる卯花の霜やたびをく神のいがきを（杜卯花）

この歌は、「しもやたびおけどかれせぬさかきばのたちさかゆべき神のきねかも」（『古今集』神あそびのうた・一〇七五）や、「神がきのあたりにさくもたよりあれやゆふかけたりとみゆるうの花」（『山家集』一七八・社頭卯花）を踏まえたものであろうが、これと似た歌を父雅世も詠んでいる。

八たびおく霜のしらゆふかけそへて神のいがきもなびく榊葉

（『雅世集』・三〇二・霜）

雅世の歌は、右の『古今集』一〇七五番歌の表現に加え、「夜を寒みとる榊葉におく霜をしらゆふ花と人やみるらん」（『堀河院百首』冬十五首・一〇五一・基俊）のように、霜の白さに白木綿を重ねて詠んだ点で、卯花を詠む雅康との違いがある。しかし、表現の上では両者は極めて似通っており、類想的ともいえよう。

雅世の歌と表現が類似する歌は他にもある。例えば、

49ふみなづみ野中に生る葛かづらはひまつはれぬ道もゆかれぬ

（野旅）

にみる「はひまつはる」という表現は、僧正遍昭が「よそに見てかへらむ人にふぢの花はひまつはれよえだはをるとも」（『古今集』春歌下・一一九）と詠んで以来、藤が絡みつきながら這い伸びる様子を表現することが殆どであったが、雅康は葛が生い茂る様子を詠んでいる。これと同じく、葛を詠んでいるのが、次の雅世の歌である。

うき中にはひまつはれぬ葛のははよその恨と見てやつれなき

（『雅世集』八五〇・恨恋）

旅路を詠む雅康とは異なり、雅世の歌は葛の葉の「裏」と「恨み」を掛け、恋の恨みを詠んだものであるが、雅康の兄雅親が、

松がえにはひまつはれて咲く藤はよそに帰らぬ波をかけけり

（『亜槐集』住吉社法楽百首・一一八・藤）

として、松の枝に藤が「はひまつはる」という従来通りの表現で詠んでいることと照らし合わせてみても、雅康の歌が雅世の歌と発想を同じくする表現を持つことは、注目すべきかと思う。

四

さて、ここまで取り上げてきた歌の中にも、『古今集』を踏まえたと思われる表現が幾つか見られたが、「雅康五十首」には、こうした『古今集』の表現享受が多く認められる。以下に、それらを挙げる。

1けふも猶かたへ雪降としと我と行かふ空や霞そむらん　（初春）

みな月のつごもりの日よめる

夏と秋と行きかふそらのかよひぢはかたへすずしき風やふくらむ

（『古今集』夏・一六八・躬恒）

2春といへば宇治の橋姫夜や寒きそらに霞の衣かたしく　（橋辺霞）

題しらず

さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらむうぢのはしひめ

（『古今集』恋四・六八九・よみ人しらず）

9我ぞゆかぬ誰が為ならじよしの山よしや人こそ花は見ずとも

（山花）

吉野河よしや人こそつらからめはやくいひてし事はわすれじ

（『古今集』恋五・七九四・躬恒）

13榊葉に見ぞまがへつる卯花の霜やたびをく神のいがきを（杜卯花）

しもやたびおけどかれせぬさかきばのたちさかゆべき神のきねかも

（『古今集』大歌所御歌・一〇七五・よみ人しらず）

14とりわくる人の心を種として万の小田にうふる苗哉　（早苗）

やまとうたは人のこころをたねとしてよろづのことのはとぞなれりける

（『古今集』仮名序）

27有明のつれなく見えしふるごとも我もしかばかりおもふとや鳴

（暁簾）

有あけのつれなく見えし別より暁ばかりうき物はなし

（『古今集』恋三・六二五・壬生忠岑）

36あたゝかにみる人いかに深山には松の雪だにわきてさむけき

（松雪）

み山には松の雪だにきえなくに宮こはのべのわかなつみけり

（『古今集』春上・一九・よみ人しらず）

40ねたしやなかゝらましかばたのまじをなにぞは露のあだしことの葉

（寄露恋）

いのちやはなにぞはつゆのあだ物をあふにしかへばをしからなくに

（『古今集』恋二・六一五・紀友則）

41今は猶なにゝ祈らん神だにもけたぬおもひにもゆるけぶりを

（寄草恋）

ふじのねのならぬおもひにもえばもえ神だにけたぬむなしけぶりを

（『古今集』雑体・一〇二八・きのめのと）

これらの歌は、歌そのものの有する内容というよりも、『古今集』の表現を表面的に用いたものが殆どである。躬恒、紀友則などの歌や『古今和歌六帖』などにも入る著名な歌の表現を踏まえており、一目見てそれと分かる詠じ方である。だが、他の歌集からは、こうした直接的な表現の利用は見出し難い。他にこのような表現享受が認められるものは、次の二例ほどである。

11勅ならば誰かは花に手もふれんあだに折とる宿のさくらよ（庭花）

内より人の家に侍りける紅梅をほらせ給ひけるに、うぐひすのすくひて侍りければ、家あるじの女まづかくそうせさせ侍りける

勅なればいともかしこし鶯のやどはととはばいかがこたへむ

（『拾遺集』雑下・五三一）

24明やらぬひかりぞしるべ春秋のしらでとしふる山かげの月

（山家月）

内裏御屏風に、いのちながき人の家に松つるある所を

はるもあきもしらでとしふるわがみかなまつとつるとのとしをかぞへて[7]

（『後拾遺集』賀・四三〇・平兼盛）

「雅康五十首」に見られる『古今集』の受容の在り方は、一つの特徴として捉えられる。一方で、雅経が撰者として携わった『新古今集』を踏まえたと思しい表現が見られないことも併せて指摘しておきたい。

五

最後に、『雅康集』に類似表現が見られる歌について触れておく。

15きく人も誰にかたらむほとゝぎす此里の名をしのぶはつ音を

（里郭公）

きく人もありとやここにほととぎすみ山をいでぬこゑのきこゆる

（『雅康集』一〇四）

この二首は、「山ざとにやどらざりせばほととぎすきく人もなきねをやなかまし」（『伊勢集』一七二、『拾遺集』夏・九九・よみ人しらず）などを踏まえた表現であろう。

18あれぞ行生さきとをきなでしこの頼む籬も隙見ゆる迄

（籬瞿麦）

この歌は、「籬瞿麦」という歌題そのままに、籬に咲く撫子を率直に詠み込んだものである。「夕暮のまがきにさけるなでしこの花みる時ぞ人はこひしき」（『古今和歌六帖』一三四八・「まがき」）など、籬の撫子を詠む歌は少なくないが、『雅康集』にも、

夏ふかみまがきにかかる花のたけ過ぎにけらしなでしこの露

（一二六）

やどりとる数もあらはに夕ぐれのまがきは山となでしこの露

（一二七）

として、籬の撫子を詠じた歌が二首収められており、雅康の好んだ歌材であったことが想像される。また、

21末なびくおなじよもぎか本あらの萩こそ花の露もふかけれ（萩露）

のように、「本あらの萩」と露を詠み込む表現は、「宮木ののもとあらのこはぎつゆをおもみ風をまつごときみをこそまて」（『古今集』恋四・六九四・よみ人しらず）を始めとして多くあるが、『雅康集』には、次のような類似の歌を見出せる。

秋風にたへずぞみゆる末のつゆもとあらのこ萩花もみだれて

（一五〇）

いずれの歌も目新さには欠けようが、『古今集』を筆頭に『古今和歌六帖』などの古典的な表現を踏まえた歌ばかりである。

歌題や構成においては、『富士歴覧記』に見られた姿勢と同じく、雅経や雅世を強く意識しながらも、その表現においては『古今集』の影響が色濃く、古典的な表現を踏まえた五十首であるといえよう。

注

（1）祐徳稲荷神社中川文庫本より引用し、私に濁点や句読点を付した。

（2）本文の引用は『群書類従』第一八輯により、濁点や句読点などを私に改めた。

（3）井上宗雄『中世歌壇史の研究　室町前期〔改訂新版〕』（一九八七年）二一頁。

（4）飛鳥井家の蹴鞠・和歌二道と蹴鞠歌については、佐々木孝浩「鞠聖藤原成通影供と飛鳥井家の歌鞠二道」（『国文学研究資料館紀要』第二〇号、一九九四年三月）に詳しい。

（5）『拾遺愚草』には「仁和寺宮五十首」と題する五十首が二種収められるが、ここで述べる「仁和寺宮五十首」は、守覚法親王主催で建久九年（一一九八）頃に詠進されたという所謂「御室五十首」とは異なる五十首である。

（6）日本女子大学日本文学研究室蔵本・西尾市岩瀬文庫蔵本などにも同奥書が認められる。

（7）『兼盛集』には「春秋もしらで年ふる我が身かな松とたけとのとしをかぞへて」（二〇三）とある。

※「雅康五十首」を除き、和歌の引用は『新編国歌大観』によった。

【翻刻】　飛鳥井雅康「詠五十首和歌」

〔凡例〕

・底本は祐徳稲荷神社中川文庫本（函号、6／2‐2／287）を用いた。

・漢字の旧字体は現行の字体に改めた。

・誤写と思われる箇所には、右傍に（ママ）と記した。

・見消ちは、‖で示した。

・池田本【池】・内閣本【内】との異同には＊を付し、後の〔校異〕に示した。

詠五十首和歌

春十二首　桑門宋世[*1]

初春

1けふも猶かたへ雪降としと我と行かふ空や霞そむらん

橋辺霞

2春といへは宇治の橋姫夜や寒きそらに霞の衣かたしく

雪中鶯

3さすかまた里なれぬ声か降雪にこぬれかくれてきぬ[*2]るうくひす

行路梅

4梅かゝにまた行初をおりかへしをよはぬえたにこゝろとゝめよ[*3]

岸柳

5ときしらぬな[*4]つこひく也岸かけに春は柳のいとをみたして

旅春雨

6谷川は雪けなかれて春雨のふるほとよりもわたりかねぬる

春月

7霞かは春さむしとて久堅の月のきぬきるためしをそみる

遠帰雁

8 もろこしのからろをし出し行舟のはるかに成て帰る雁金

山花

9 我そゆかぬ[*5]誰か為ならしよしの山よしや人こそ花は見すとも

関花

10 山桜今や咲らん逢坂のせきの清水もにほふ春哉

庭花

11 勅ならは誰かは花に手もふれんあたに折とる宿のさくらよ

河款冬

12 くちなしに咲山吹のかひもなし名にも花にも井手の玉水

夏七首

社卯花

13 榊葉に見そまかへつる卯花の霜やたひをく神のいかきを

早苗

14 とりわくる人の心を種として万の小田にうふる苗哉

里郭公

15 きく人も誰にかたらむほとゝ[時鳥]きす此里の名をしのふはつ音を

岡郭公

16 折しもあれ妹と我きく時鳥おかへの宿に幾夜待[*7]ても

夜盧橘

17 すゝの音もなるとはすれと五月やみ花橘によはき風かな

籬瞿麦

18 あれそ行生さきとをきなてしこの頼む籬も隙見ゆる迄

江蛍

19 飛蛍よるは入江の芦ねはふうきはひかりに見えて行かな

秋十二首

早秋

20 きのふ迄みそきに待し秋かせをけさから[*9]さきになへて聞哉

萩露

21 末なひくおなしよもきか本あらの萩こそ花の露もふりけれ

荻風

22 荻といへは一葉の上に秋風ををのか[お*10]ものとややとし[*11]なれけん

尋虫声

23 虫の音はこなたかなたに迷へとも我かと鳴てくる野へはなし

山家月

24 明やらぬひかりそしるへ春秋のしらてとしふる山かけの月

野径月

25 誰かいますかのあらのゝ露わけて今宵は月のくまたにもなし

舟中月

26 時のまにとまもるかけそかはり行おほえすめ[*12]つる浪の上の月

暁鹿

27 有明のつれなく見えしふることも[*13]我もしかはかりおもふとや鳴

河霧

28 誰ならむ槇の板はしふみならし行人見えぬよとのかはきり

擣衣幽

29 所きくいまやねさめの里の名をよそにしれとてころもうつ[*14]声[*15]

夕紅葉

30 夕霧も心してをけたまほこのたよりにをらむ木々の紅葉は

残菊匂

31 とき過て誰かは今もきせ綿のそれかとにほふ霜の[の]白菊

冬七首

朝時雨

32 むかしおもふふかき涙や曇らんあくる朝戸[*17]のうちしくれゆく

竹霜

33 猶さむきはたれ霜ふる呉竹に[*18]夜のまの風のほとも見えつゝ

池水鳥

34 氷行いつくかひまと鳰とりのうきても沈む池のおもかな

嶋子鳥

35 妻こひもわりなきものかあへの嶋鵜のゐる岩に千鳥鳴なり

松雪

36 あたゝかにみる人いかに深山には松の雪たにわきてさむけき[*19]

湖雪

37 逢 高きひらの深雪を舟路にて影にさほさすしかのうら人（本ノ俤[*20]）

惜歳暮

38 今はよし左にも右にも等閑の老こそとしもおしみなれつれ

恋六首

寄雲恋

39 よそにてもみるや妹背の山かつら誰きぬ〳〵にかゝりそめけん

寄露恋

40 ねたしやなかゝらましかはたのまし[*21]をなにそは露のあたしことの葉

寄烟恋

41 今は猶なにゝ祈らん神たにもけたぬおもひにもゆるけふり[*22]を

寄草恋

42 おもかけはさなからみしにこ草のなとにこやかにならはさりけん

寄鳥恋

43 あくる夜をつけすともかなをのか上に[*23]別をしらぬ鳥にやはある

寄枕恋

44 限ありていつかは夢にこ枕のうへに声なき夜をたのめとも[*24]

雑六首

暁述懐

45 いつかさめむみゐのあかくむ暁になれてもまよふ夢のうき世は

閑中燈

46 板まあらみまたたく影にめもあはて山かせみゆるねやのともし火

山旅

47 山遠くおほく[*25]（ママ）すきつる老の坂かへり見てこそくるしかりけれ

海路

48 風しあれはおもひしよりもをそくとも日数さためぬ舟路をそ行[*26]（ママ）

野旅

49 ふみなつみ野中に生る葛かつらはひまつはれぬ道もゆかれぬ[*27]

寄松祝

50 とははやな松のこゝろも誰にとか千代をまことにゆつり置へき

明応八年十二月廿一日、於微妙寺之山陰、焼火之中、詠之。不可在[*28]他見云々。

右、[*29]二楽軒五十首詠草、以自筆之本写焉。

元禄六年癸酉歳

仲冬中旬、再令写之畢。

〔校異〕

＊1宋世―采世【池】

＊2ぬる―ゐる【池】【内】

＊3ゝに―へも【池】

＊4なつこひく―なるこ引【内】

＊5ぬ―む【池】【内】

＊6款冬―山吹【池】【内】

＊7待ても―またれて【内】

＊8瞿麦―撫子【池】【内】

＊9からさき―は草木【内】

＊10をのか―かのこ【池】

＊11なれ―そめ【内】

＊12めつる―めくる【池】【内】

＊13も―を【池】【内】

＊14きく―きく（本ノマヽ）【池】

＊15声―也【池】（ち声）【内】

＊16ふかき―ふるき【池】

＊17朝戸―水（朝）戸【内】

＊18に―も【池】

＊19人―〳〵【池】

＊20逢―みね【池】峯【内】

＊21を―な【池】【内】

＊22けふり―思ひ【池】

＊23か上―うへ【池】【内】

＊24池田本は44番歌が欠落する。

＊25おほくす―おほえす【池】【内】

＊26海路―海旅【池】【内】

＊27はひまつはれぬ―はひまつはれぬ（本ノマヽ）【池】

＊28在―有【池】【内】

＊29内閣本には「本云、右、二楽軒…」とある。

〔付記〕

本稿は、第35回古典研究会における発表の一部を元にしている。席上ご助言を賜った先生方、また、資料の翻刻についてご許可を賜った祐徳稲荷神社に、心より御礼申し上げる。なお、本稿は、平成二五年度JSPS科学研究費助成事業（研究活動スタート支援、課題番号２５８８４０４９）による研究成果の一部である。

（ひだか　あいこ・本学人文科学研究院専門研究員）